

# 心理臨床における環境的アプローチに関する実践研究

—臨床家のかかわりをめぐる精神分析的考察—

長谷 綾子

2019 年

## 【論文要約】

本論文は筆者が初心の頃の臨床経験から提起された問題について系統的、学術的に探究する実践研究である。その問題とは、心理臨床家（以下、臨床家と表記）が心理臨床の営為をとりまく環境といかにかわり、その体験をクライアントにいかに還元するかという問いである。

昨今、クライアント個人だけでなくクライアントの家族や友人、さらには機関内外の協働者といった環境とのかかわりが臨床家に求められることは、基本的、かつ重要な事項として認識されている。しかし同時に、その実践に困難が伴うことも、現場に身を置く臨床家なら誰もが実感するところである。この問題が時に、クライアントのいのちにかかわる重大な不利益をもたらす事實は、児童虐待をはじめとする様々な事案を以て、痛々しくも私たち臨床家に突き付けられる。しかし、これほどまでに基本的なものと認識されながら、なぜ、問題が絶えないのか。筆者はこの問いについて、臨床家の認識に影響を及ぼす、より原始的な次元の心理的要因として情緒に焦点を当てた。

環境との相互作用における臨床家の情緒に着目し、活用する立場として現代精神分析がある。本研究の前半ではその立場に基づくアプローチの独自性と課題を丹念に抽出し、後半では筆者の実践例を用いてさらに検討し、考察を進めていった。

本論文では「環境」を ①クライアントにとっての環境としての臨床家や面接室、②クライアント、臨床家にとっての環境としての組織、組織に所属する協働者、③さらに②をとりまく環境としての社会、その社会に生きる家族や知人を含めた様々な人々、を含めるものと定義した。また「環境的アプローチ」を、個人と環境との相互作用に着目し、直接的、間接的に活用するアプローチとした。

臨床家の業務の中にはグループや組織、地域を対象としたアプローチも多く含まれるが、本研究ではまず、その根幹をなす個別面接の実践を軸とした環境とのかかわりについて、詳細に探究することに重点を置いた。

本論文の構成については、まず第一章で筆者の初心の頃の実践例を提示し、その考察を通じて問題提起を行った。そこでは心理面接のプロセスと協働のプロセスを併記し、両プロセスを複眼的に検討した。その結果、抽出された問題は、①心理面接と環境のプロセスの相互性、②機関特性や職員集団など、心理臨床をとりまく環境の力動的アセスメントの枠組みと臨床的活用、③環境とのあいだで生じる、臨床家の情緒体験の臨床的意味、の三点に整理された。

続く第二章、第三章では、文献研究を通じて、精神分析に基づく環境的アプローチの可能性と限界について検討を行った。

第二章では、精神分析において初めて環境論を俎上に載せた Winnicott が属する対象関係論の立場を中心に、主要な論者の主張に見る「環境」とのかかわりに焦点化し、歴史的展開を概観した。そして、もともと精神分析では Freud を始め、「環境」を外在するものとして分析の対象としない立場をとってきたが、Winnicott の環境論を端緒とし、内的世界を映し出すものとして環境を捉える立場や、外在する環境との実際の交流を臨床的に活用する立場が登場したことを述べた。さらに日本の精神分析的心理療法における環境の位置づけと、臨床的活用についても探究を進めた。その結果、Winnicott の概念に基づくマネジメント、現代クライン派による心理臨床の「場」との相互作用、小此木（1990）の治療構造論の三つの観点を導き出し、各々の活用可能性と課題について考察した。その上で、わが国の心理臨床を取り巻く昨今の背景を踏まえた理想と現実の問題を取り上げ、精神分析に基づく環境的アプローチの今日的意義について、昨今の心理臨床を取りまく実情と臨床家の内的なプロセスとの関連に着目し、考察を試みた。

第三章では、第二章で論じた精神分析に基づく環境的アプローチとの比較を行うべく、精神分析以外の諸論について歴史的展開を辿り、近年の動向を概観した。その上で、環境的アプローチの代表格とされるコミュニティ・アプローチと家族療法を取り上げ、第二章に続いて臨床家の情緒的体験に焦点化し、探究していった。その結果、これらのアプローチにおいては、臨床家の情緒が研究対象として取り扱われていないか、議論の対象とはなっても時代や立場によっては寧ろ排除する見解があることが示された。そこでさらに事例比較法による検討を行い、実践的な次元における各々の独自性と課題を明らかにしていった。そして総括として、精神分析以外の環境的アプローチ諸論において、人と人がつながっていくはずの「生きた」側面が取り扱われない傾向について Kleinman（1980）の説く医療文化論と狩野（2009）が言う心理療法の生命現象論の観点から疑問を呈し、精神分析に基づくアプローチの貢献可能性を考察した。同時にその課題にも触れ、臨床活用のための条件について論じた。

第四章では、環境をめぐる実践上の問題の中でも主要なテーマとされる協働を取り上げ、多職種協働で困難が生じるプロセスに関する調査研究を行った。対象は臨床家だけでなく他職種の専門家も含め、半構造化面接を行った。分析では、協働者とのコミュニケーションで体験された情緒に着眼し、手法はグラウンデッド・セオリー・アプローチを採用した。その結果、職種にかかわらず、支援者が協働者に抱くネガティブな想像を含む内的な過程が、協働関係の悪循環を生み出していることが明らかとなった。さらに、この内的な負の連鎖が、理想的な支援を阻む心理的要因につながっていることもあわせて示され

た。考察では、専門家として当然とされるごく基本的なコミュニケーションが、危機的な事態に接することで閉ざされてしまう事実を取り上げ、その背景と対処について意識的な次元から論じた。さらに、理想的な協働を阻む無意識的なメカニズムについて、被支援者と支援者のあいだで生じる投影同一化の観点から考察を試みた。そして、協働関係を閉ざすところの背景に想定される支援者の傷つきに着目し、支援者が自らのナルシシズムとその痛みを超えて不確かさに耐え、留まる力（負の能力；negative capability）を育んでいくことの意義を論じた。

第五章以降は、筆者の臨床例を示し、第一章で提起された問題について実践的な見地から検討を進めた。

第五章では、心理臨床の場を置く機関を環境と見立て、治療構造論を援用した環境の力動的アセスメントの枠組みを提案し、その活用可能性と課題について考察した。また、心理臨床の営みがいかに環境の影響を受け、及ぼすかという相互性についても検討した。実践例では、曖昧な面接構造で多職種協働を行う相談機関での体験を提示し、環境の力動的アセスメントの枠組みを活用することでその構造の「揺らぎ」が意識化されやすくなること、またその「揺らぎ」は臨床家の内的姿勢の「揺らぎ」と連動しており、それへの気づきが構造の再構成、すなわち支援の立て直しへの契機となることを考察した。さらに、環境の構造が揺らぎ、再構造化されていくプロセスは、面接のプロセスが揺らぎ、立て直されていくプロセスと併存していることも明らかとなり、面接と環境のプロセスの相互性が支持された。

第六章では環境を、心理臨床の「場」とその「場」を置く機関、さらにそれを取りまく社会といった三層構造に見立て、面接内外の環境で生じた危機をクライアント、臨床家の各々がいかに乗り越え、それがクライアントのこのころの変容にどのように寄与したかを検討し、考察した。実践例では、臨床家が組織の一員として無意識裡に組織のルールに従う姿勢によって、時にクライアントのニーズを看過してしまうことや、臨床家が一生活者として出会う私的な出来事が治療を危機に陥らせることが示され、面接と環境のプロセスの相互性が支持された。一方で、そのような危機のさなかにあっても、治療内の無意識的なコミュニケーションを契機にプロセスが展開したり、面接外における臨床家自身のこのころの作業を通じて治療的意味がもたらされるという、創造的側面も示された。さらに、そのような創造的な方向へと向かうために必要な両者のこのころの作業について、Winnicott（1968）が説く「破壊と創造」のパラドキシカルな視座から考察を深めた。

第七章では、スーパーヴィジョンが臨床家の環境として果たす機能につい

て、また心理面接に寄与するプロセスについて検討した。実践例として筆者が初心の頃のスーパーヴァイジー体験と長年の経験を経た後のスーパーヴァイジー体験を提示し、スーパーヴィジョンの場合は、スーパーヴァイジーがクライアントの苦痛を受け、抱えきれなくなった情緒がたち現れることを述べた。そして、その現象をスーパーヴァイジーが敏感に感受し、スーパーヴァイジーが「今、ここ」で体験する情緒を手がかりに、クライアントが到底、こころの内に抱えきれず外に投げ出してしまった情緒について考え、味わう時空間を提供するかかわりが重要であることに言及した。また、臨床家がスーパーヴィジョンを契機に専門家として、そしてひとりの人間としてのありかたを再考する機会を得ることの意味について、自身の経験を加筆して述べた。また、この事態を Winnicott (1971) の「可能性空間」の概念から考察し、スーパーヴィジョンが時に、スーパーヴァイジーだけでなくスーパーヴァイジーにとっても、臨床家として、組織人として、さらに一個人として生きる橋渡しをする時空間となることに言及し、人間学的な視座からさらなる考察を加えた。

第八章では、第一章で提起した問題について各章の論を踏まえ、総合考察を行った。まず、第一に提起した「心理面接と環境のプロセスの相互性」については、後半に提示した複数領域におけるすべての実践例において認められたことを述べた。そしてこの現象において、心理面接と環境の両プロセスはともにそこで生じる相互的な関係性が核となって進展し、さらにその両プロセスが相互に絡まり合う形で発展する様相が認められたことから、この原理を「生命現象」が織り成す有機的なネットワーク・プロセスとして捉える視座を提示した。また、筆者の説く「心理面接と環境のプロセスの相互性」とスーパーヴィジョンの平行・プロセスの概念を比較し、前者が後者を包括する概念であることを示しつつ、平行な「様態」というよりも相互力動的なプロセスに主眼を置くことを述べた。

問題の二点目として提起した「環境の力動的アセスメントの枠組み」については、特に臨床家自身の情緒を活用したアセスメントの視座と、環境との相互的な関係性に着眼した観点に本論文の独自性が見出せることを述べた。さらにその活用においては、臨床家がクライアントとかかわる自身の内的な動きにいつでも注意を払うのと同様に、環境とかかわる際の内的な動きについても注意を払い続ける必要があることに言及した。そして、そのための訓練の必要性についても述べ、構造化されたスーパーヴィジョンにおいて関係性を通じて「今、ここ」の気づきを体験的に学ぶことが、心理臨床におけるクライアントとの関係性や、協働者との交流に生かされることを論じた。

三点目に提起された「環境の文脈に巻きこまれることの臨床的意味」につい

では、臨床家が自らを取りまく環境の文脈に巻きこまれながらもいきいきと情緒を体験し、面接の内外を往還しながらその情緒とそこで起きている事態について考え、クライアントの理解へとつなげる能動的な姿勢が、心理臨床の営為—生命システム—の有機的なプロセスを創出し、クライアントの変容をもたらすことについて述べた。さらにその変容のプロセスについて、第一章の実践例に立ち戻って詳細に検討し、抽象化することを試みた。その結果、1 環境をアセスメントする 2 環境と面接の文脈に巻きこまれ、時に機能不全に陥る 3 それでも環境と、クライアントと交流し続ける 4 環境のアセスメントが修正され、新たな対象が創造されていく 5 クライアント、環境との相互交流が発展する 6 面接が進展し、クライアントの内界で新たな対象が創造されていく 7 クライアントはこれまで受け入れがたかった現実に対峙し、その現実を能動的に生きる方向へと変容していく という創造的側面が抽出された。

これら総合考察を踏まえた上で Winnicott の環境論に立ち戻り、臨床家に「憎まれていることに到達した後で、はじめて愛されていることを信じられる」クライアントのニーズという観点から環境的アプローチの本質について論考を深めた。そして、臨床家がクライアントの環境として生き残るためには、自らをとりまく環境と情緒的にかかわる必然が生じることを述べた。

さらに精神分析以外の観点から臨床家が環境の文脈に巻きこまれることの意味を検討すべく、Jung のコンステレーションの概念と河合（1986, 1992）、皆藤（2018）の観点から発展的な論考を試みた。そして最後に、心理臨床という営みが「生命現象」であるゆえに「巻きこまれないこと」と「巻きこまれること」を往還する意義を説き、臨床家が中立性を保持することの困難について論じた。

終章では本研究に残された課題と展望を述べた。課題として、「環境的アプローチ」の定義について、筆者の主張とシステム論との関係について、本論文で示唆された結果の普遍性について、精神分析理論の応用についての四点を挙げた。そして最後に、臨床家が知らないところで、どれほど心理臨床の営為が支えられているかは計り知れないことを述べ、臨床家はどのような事態にあっても環境との交流を絶やすことなくそこで体験される自身の情緒に対峙し、クライアントの理解へとつなげていくことの意義について論じた。そして同時に自分に何ができるか、できないかを真摯に考え、伝えていくという専門性を認識する必要性を説いた。